
宰相メレイト

ハナモト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宰相メレイト

【Nコード】

N5733V

【作者名】

ハナモト

【あらすじ】

『戦いと道化師の伝説』のメレイト視点。ネタバレを多く含みます。『戦い』の方の裏舞台的なものになっています。本編ではこのとき、裏ではこんな動きがある、というのも戦記物の面白さじゃないでしょうか。こちらの話しはファンタジー色はほとんど無く、戦記物として楽しめるようにしていきます

プロローグ 火蓋（前書き）

この小説は『戦いと道化師の伝説』の裏舞台になっており、ネタバレを多く含みます。ネタバレが嫌いという人はご注意ください。また作者としては本編とこちらにおいての『思考のすれ違い』を楽しんでもらいたく、こちらを同時進行として書いていきたいと思っています

プロローグ 火蓋

どうにもおかしい。ロンデュの動きが無さすぎる。あの国はあれほど大人しい国ではない。……もし裏切りがあったとしたら、大変な事態になる。ドライスに忠告するべきか。……情報は十分ではない。だが……。

仕方ないか。とりあえずドライスに話してそれから決めよう。

そう決めて自分の書類だらけの執務室から出る。やる事が多すぎる。考えることも。ドライスの奴、全部俺に任せているんじゃないだろうな。

変な邪推をしながら国王の寝室へと急ぐ。もうすでに夜だが大丈夫だろう。

等間隔で並んだ燭台で仄かに照らされた暗い廊下を歩き、内殿へと向かう。王宮は外殿と内殿に別れている。外殿では朝政、朝議などの政治に関する業務を執り行う場になっている。

それに対して内殿は王族の私室が並んでいる。それ以外では認められた家政婦などの一部の人間しか内殿への入室を許されない。

食堂は内殿外殿共に付属しており、外殿の食堂は同時に外交の場にも成りえるためこちらは王族といえども滅多なことでは使われない。

外殿から内殿への入り口はちょっとした門になっており、二人の守衛が常を守っている。例えば誰であろうとここで武器の検査を受ける。俺として例外ではなく、守衛に止められた。

「すみませんが検査させていただきます」

検査を済ませると二人は再び不動の構えに戻る。誰であろうと例外を作らない、いい守衛だった。

そのまま内殿に入るともう誰にも会うことなくドライスの寝室まで辿り着いた。ノックをして返事を待つ。少し間を置いてからドライスの返事があった。

「誰だ？」

「メレイトです」

「メレイト？ ……入れ」

「失礼します」

中に入るとちょっとした家を建てれそうな大きさの部屋で、ドライスが机に向かって座っていた。何か書いているらしく、机と向き合っている。少し待つと、作業が終わったようでこちらに向き直る。

「こんな時間に一体どうした？」

「はい。実はカナテイルについてなんですが」

「何かあったか？」

「いえ、まだ何もありません。ただ最近の彼の動きが少し不穏です」

ドライスが眉をひそめる。当然だ。カナテイルはドライスの父の代から仕えている忠臣。それが不穏な動きなどとても信用できる話ではないだろう。

「何を根拠に言っている」

「六年前からロンデュの攻撃が一切ありません」

「……それだけでは弱いな。根拠にもならんぞ」

確かにそれだけではあまりに弱い。偶然侵攻が無かった可能性は十分ありえる。だがあの国がこれほど大人しくしていることはあまり無い。

「杞憂、ならいいのです。ですが二年前からルディン要塞でいくつか止まっている情報もあるようでして」

「止まっている情報だと？」

「ええ。一つはロンデュの国民は餓えているという事です」

「なんだと」

これはかなり重要な事実だった。餓えているということは食べ物を求めるために侵攻を開始する合図だからだ。そのためにロンデュが餓えないようある程度の食料が流れるようにしていた。

「食料がロンデュに行っていないということか」

「というよりはそれで足りないほどの食糧難がこの二年で起こっているようです。あの国は元々蓄えが少ないので一年耐えれても二年は……」

ドライスが考え込んでしまった。これほど重要な情報が首都でもあるアウレリウスに来ていないとはどういう事なのか。それだけでもカナティルからの悪意が読み取れる。

「……お前はその情報をいつ掴んでいた？」

「つい最近です。この数年は南部の方ばかりきにしていましたから。私の失策です」

苦々しい。情報収集を疎かにしてしまった。諜報部隊の人数が少ないのは言い訳にならない。抱えている諜報部隊の隊長が三年前に変わってから情報が偏っている。今の隊長を信頼しすぎてしまったಿತかもしれない。あまりに南のカイセール国ばかりの情報ばかりだったので他を調べるように言うてようやく今回の情報が手に入った。

「カイセールか。戦争だか内乱だか起こっているからな。仕方が無いといえば仕方が無いか……」

ドライスも同じく苦々しい表情をしている。俺がこんなミスをした事が信じられないのだろう。俺自身ですら信じきれないのだからか。

「他に何か掴んだか？」

「武器を集めています」

「……戦争の準備だな」

武器を集め、食料を求めている。条件はどんどん揃ってきている。

「だがそれでもカナティルが裏切っていることにはならん……」

「陛下、しかし」

「カナティルを呼び戻せ」

「しかしそれではルディンが」

「副将でもしばらく耐えることは可能だろう。すぐに援軍を送れる状態にしておけ」

「……はい、かしこまりました」

何か重要な事を見逃している気がする。だがそれが何か分からない

かった。これほど自分の老いを感じるのは初めてだ……。

01 執務室にて（前書き）

この小説は『戦いと道化師の伝説』の裏舞台になっており、ネタバレを多く含みます。ネタバレが嫌いという人はご注意ください。また作者としては本編とこちらにおいての『思考のすれ違い』を楽しんでもらいたく、こちらを同時進行として書いていきたいと思っています

01 執務室にて

広い王宮の廊下を外殿にあるドライスの執務室へ向かって歩いてきた。何を聞いてくるのかは分かりすぎるほど分かっている。俺も訝しんでいる所だ。聞かれても答えようが無い。それが足取りを重くさせていた。

普通の倍の時間をかけようやく辿り着いたドライスの執務室の横には守衛がいた。

外殿だろうと王の部屋の前には守衛がいる。内殿ほど厳しく無く、顔を確認するとそのまま入室を許す。重要な人物ばかりがくるためにドライスが守衛を氣遣ったためだが、無用の氣遣いだと俺は思っている。

それでいて内殿でそれを許さないのはアルフィスとケルトルのためだろう。王族である二人も内殿におり、彼らを狙った者が来ないとも限らない。

守衛は一旦道を阻むがこちらの顔を確認すると、特に何も言う事もなく道を空ける。この守衛がいるために中では大きな声で話すことは出来ない。防音は利いているため普通に喋る分なら問題はない。ノックをし、返事が返ってきたのを確認してから中に入る。

中にはこの王宮にしては狭い部屋の中央に書類まみれの机が一つ、四方の壁にはさまざまな書類の詰まった本棚が並んでいた。そしてドライスは書類に埋まるようにして机と向かい合っていた。

「失礼します」

「随分と遅かったな」

「どうもすいません」

謝ったが悪びれない俺にドライスは肩眉を吊り上げるが何も言わない。これぐらいの事なら昔からよくあった。

「お前を呼んだのは聞きたい事があってな」

「カナテイルの事でしようか？」

「そうだ。何故奴は来ない。距離を考えても一ヶ月前には連絡がいつてるはずではないか」

「私の諜報部隊は準備をしている、としか連絡してきません。アルフィス様にもいつの間にか召還した事が知られたようです」

カナテイルを召還したのだが、その連絡が届いているはずなのに全く帰ってくる様子が無い。内容が内容だけにアルフィスには内密にしていたのだが、最近洩れたらしくカナテイルの帰還を楽しみにしている。まあ元々内密に来る方が難しかったのは分かっていたのでそれは問題無いが。

「アルか、あいつはカナテイルの事を尊敬しているからな。秘密にしておきたかったがまあ仕方なからう。元々無理な話だ。むしろ今までよく気づかれなかったものだ」

そこで一度ふうとため息をつき、椅子にもたれかかった。

「それにしても準備をしている、というだけではな。準備に一ヶ月もかけてるというのか？ 軍を動かすわけでもなからうに」

「はあ、そうですね」

その時部屋にノックの音が響いた。ドライスは一度こちらを向い

たが、構わずに入室を促した。入ってきたのは筋骨逞しく、背の高い一人の武将だった。彼はカナティルの重臣の一人であり、ナムルという名前だったと思う。カナティルの抱える猛将だった。頭の髪は剃っており、顔の半分を覆うような髭が彼の見た目をさらに恐ろしいものになっている。

その見た目とは裏腹に頭も切れ、カナティルの懐刀とさえ言われている。

「誰だ？」

「はっ。ルディン將軍一の部下、ナムルと申します」

どうやら忘れていたらしいドライスの質問にも気負うことなく答えた。ルディン將軍はカナティルの事を呼ぶ尊称だ。ドライスはカナティルの配下と聞き、露骨に嫌な顔を浮かべてしまっていた。これはまずい。

「陛下、私は退室しましょうか？」

ドライスの意識を逸らすと自分の表情に気がついたらしく、はっとし無表情を装う。

「いや、メレイトはここにおれ。で、そのカナティル一の配下が何のようだ？」

「はっ。ルディン將軍が先日ルディン要塞を出立なされましたので、將軍は私に先発し、ご報告せよとの命令を受けました」

ドライスの表情にも気付くことなくナムルは律儀に答える。それとは反対に再びドライスの表情が険悪になる。

「ようやく出たか。それで到着はいつになる」

「七日後になります」

「一週間後か。……ナムル、今回カナティルは随分とゆっくりしていたが何か理由があるのか？ 本来ならどれほどゆっくりしても、二週間前に着いていても全くおかしくないが」

「はっ。実はロンデュ国と取引をしており、遅くなりました」

「取引だと？」

「食料を提供する代わりに武器をこちらに送るようにと」

そんな動きは報告されていないが、気付かぬところでの裏取引があった、ということだろうか。前線の將軍にはある程度の戦略的外交は許されている。この程度はドライスにとっても許容範囲ではあったが。

ナムルの説明の弁解の不可思議さに思わず口を出してしまう。

「……それでロンデュが納得したというのですか？」

「最初のうちは確かに渋っていたのですが、その説得に少し時間がかかりました。ですがようやくロンデュ側も受け入れまして。ただその代わり少し問題が起きまして」

「問題だと？」

「はっ。この取引のためにルディン要塞の食料が足りなくなり、あえて兵をいくらか連れ帰る事で食料問題を解決する、との事です」

「……そんな、馬鹿なことが」

ドライスはゆっくりとした口調でそう呟く。青筋を立て怒りに震えている。俺も無表情を装ってはいるが全く同感だった。

いくら取引をしたと言ってもルディン要塞の兵を割くなど論外。あの兵力だからそのルディン要塞だった。

おまけに食料が足りないから兵を割いてくる？ まずそうなるほど食料を取引に使うのがおかしい。仮にしたとしても食料なら他から十分に回すことも可能だ、兵を割く必要性は全く無い。

兵を割くとしてもそれに一体どれほど意味があるというのか。兵の数にもよるがここに来るまでに一週間以上はまずかかるだろう。そのために兵糧をまた用意しなければならぬ。結局ルディン要塞の食料がさらに減ることになり、どっちにしろ食料を輸送しなければならぬ。

結局のところ兵を割くよりルディン要塞に食料を輸送する方が早く済む。

ルディン要塞では屯田制もまた採用しており、多少の食料は兵自身に作らせることで減多な食料不足もないため、ある程度の輸送で済むこともルディン要塞の利点であったが、カナティルの方法はむしろルディン要塞の無力化にも等しい行為だった。

「ナムル、すぐに戻りカナティルに伝えろ。兵を動かすことはならぬと」

「はっ。しかしルディンにつく頃にはすでに將軍は出立されてる可能性が高いのですが」

「それでもだ！ いいから今すぐ行け！」

とうとうドライスの我慢が切れた。ナムルを怒鳴りつけ、退室を促す。その怒声を受けたナムルはというところと恐々とした様子もなく、むしろふてぶてしい態度でゆったりと出て行った。

それがまたドライスの怒りを加速させ、その怒りの矛先がこちらへと向いてしまった。

「メレイト！ 貴様がもっと早く把握していればこんな事態にならなかったのだ！」

「申し訳ありません、私の失態です」

激情家のドライスにあえて逆らわず、受け流す。付き合いは長い。

こういう時のドライスには何を言っても火に油だ。それに激昂したドライスを一番嫌っているのはドライス自身なのも知っている。それをこちらから無理に攻めるつもりも無い。

怒鳴ったドライスは謝罪を聞き、一気に怒りが冷えたらしい。

「……いや、済まなかった。あまりに理不尽だったな。それにしても今回の事は一体……」

「防衛を固めておいた方がいいかもしれません。まさかカナティルがそのまま攻めてくる、ということは無いでしょうが、近衛兵二万を臨戦態勢にしておいた方がいいですね」

「そうだな。念のために食料をここへ輸送もさせておけ。兵を連れてきた時、餓えさせるわけにはいかん。兵に罪は無い。兵もこちらへ呼びよせ、近隣で待機させておけ。数はそうだな、五万もあればいいだろう」

「かしこまりました。呼び寄せる兵は北のハラル城砦からでよろしいですね？」

「お前に任せる」

「さっそく手配いたします」

そう言って一礼し、ドライスの執務室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5733v/>

宰相メレイト

2011年10月9日11時54分発行